一

半刻ほど仮眠をとっただけで、宮戸川に出た。裏口から庭に入ると、井戸端では松吉と次平が、鰻の入った竹籠を前に仕事を始めようとしていた。

「おめでとうござる。今年もよろしくお願い申す」

磐音の挨拶に二人が新年の挨拶を返し、

「朝寝坊かい。旦那にして珍しいな」

と松吉が笑った。

「相済まぬな。南町の与力どのに頼まれごとをして、寝たのが遅かった」

言い訳をする磐音の視界に親方の鉄五郎が笑顔を見せた。

「竪川で船頭がさ、なんでも中橋広小路の伏見屋さんに押し込みがあって、凄腕の浪人に押し込みの一味が切られたという噂をしていたが、どうやら坂崎さんの仕事らしいね」

「正月早々、笹塚孫一様の助太刀をいささか」

と応じた磐音は、遅ればせながらと断って新年の賀を述べた。

「これはご丁寧に恐れ入りますな。今年もよろしくお付き合いください」

と応じた鉄五郎が、

「坂崎さんは今年も波乱の幕開けですな」

と笑った。

磐音は、次平の隣に飯台を持ち出し、割き包丁や目釘を用意した。準備を整えると、竹籠の鰻に向かって合掌し、成仏を願った。それをみていた松吉が、

「押し込み強盗を叩って斬ったりよ、鰻に合掌したりよ、坂崎の旦那も松の内早々忙しいな」

と苦笑いした。

磐音が宮戸川の仕事の帰りに六間湯に立ち寄り、長屋に戻りついたのが昼前の刻限だ。すると戸口に、豊後関前藩のお直目付、中居半蔵からの手紙が挟んであった。

＜今宵暮れ六つ、佃島で会いたし＞

というものだ。

昨年、中居と磐音は、佃島の漁師夫婦がやっている安直な魚料理の店で会っていた。それにしても暮れ六つとなれば、帰り舟はどうするのだろうと思いながら、まずはひと眠りと床を伸べて潜り込んだ。

磐音は白魚漁で有名な佃島に渡る終い船に間に合った。相客は、年賀帰りの男と、買い物帰りの島の女ばかりだ。

海を渡る風が着流しの首筋に当たって冷たい。

正月飾りが潮風を受ける佃島の船着場に、船を迎える家族が八，九人集まっていた。

その中に羽織袴の武士がいた。だがその羽織袴も、洗い晒した木綿もので、ごわごわしているのが見て取れた。江戸藩邸勤番が長い中居半蔵にしては珍しい格好だ。

「おめでとうございます」

渡し船の中から磐音が声を放った。

中居は黙って頷いた。

渡しの舳先が船着場に軽くぶつかると、出迎えの一人が舫い網を摑み、手早く終い船を繋いた。

磐音は船着場に飛ぶと中居のそばに行き、帰り船のことを訊いた。

「その件なれば、心配いたすな。店の主が送り届けてくれることになっておる」

磐音は安心した。

朝の早い宮戸川のしごとのことを気にしていたからだ。

漁師夫婦の店の客は、磐音らのほかに島の男たちが三、四人だけだ。

二人は板の間の入れ込みの一角に向き合って座った。

すぐに裂けが運ばれてきて、中居は徳利を取ると磐音の杯に酒を満たした。その徳利を取った磐音が今度は中居の器に熱燗を注いだ。

「本年もよろしく頼む」

「こちらこそよろしくお頼み申します」

二人は改めて年頭の挨拶を交わすと酒を口にした。

「坂崎、国家老の正睦様から手紙を貰うた。その件で今宵、そなたに足労をかけた」

と中居が言った。

藩の内紛騒ぎの後、藩財政の改革の立案に関わってきた磐音の父の中老正睦は、藩主福坂実高の命で国家老の地位に就いていた。

関前藩六万石には、銀二千六百貫の借財のほかに、不正借り入れされた一万六千五百両とその利息を合わせた二万余両が加わり、関前藩実収のおよそ五年分もの借財があった。

参勤下番の入費さえ目処が立たぬ藩の国家老に就いた正睦は、昇進を喜ぶというよりは茨の道を歩かされることになる。

「そなた、京の旅籠にて東源之丞様に会ったそうだな」

磐音が頷く。

「その折り、そなたは東様からの関前藩への復帰話を、借財を減額するために藩の外に身をおいていたほうがよいと言って断ったとか」

「はっ、はあ」

磐音は曖昧に返事をした。

「それがしもそう思う。そなたが関前藩士に戻れば、江戸市中にうじゃうじゃおる勤番者の一人になるにすぎぬ。だが、藩を離れたそなたは違う。両替商の今津屋などと対等に付き合いをしておる。これを利用せぬ手はあるまい」

と中居半蔵は平然と言い切った。

「中居様、それがし、理由はともあれ、関前藩を抜けた身にございます。そうそう簡単に復帰が叶うはずもなく、また叶うては、藩の規範は無きに等しいと、他藩から軽んじられることになります。それが市井に身を置く第一の理由にございます。そのことを……」

と中居は何度も頷いた。

「だがな、藩を出たそなたの力さえも借りねば、関前藩の財政はもはや立ち行かぬのだ。そなたもお父上の正睦様にだけ汗を描かせるのは心苦しかろう。藩を離れようと離れまいと、子が親を手伝うのは当然ではないか」

「それがしにどうせよと仰せでございますか」

中居半蔵は懐から油紙に包まれた分厚い書状を出すと、

「そなたのお父上の手紙じゃ。後刻呼んでくれ」

と渡すと一つ息を吐いた。

磐音は両手で伏し拝んで父の手紙を受け取った。

「坂崎、近々そなたのお父上の意を受けた江戸家老が就任される。むろん殿もご承知の上だ。これにてようやく国許、江戸と藩財政改革の体制が整うことになる。ついては、関前藩はこの十年、厳しい窮乏生活を続けることになろう」

中居半蔵は厳しい顔でそう言った。だが磐音は、藩の実収五年分にも及ぶ借財が十年で返済できるとはとても思えなかった。おそらく当代だけの努力では叶わぬ再建だった。

「それがしも簡単に借財が減るなどとは考えておらぬ。藩士の大半は、未だ豊後関前藩は安泰、禄は孫子の代まで貰えると思うておる。かような楽観的な考えを植えつけたのは、先の国家老宍戸文六とその一派だ。むろん文禄どのも藩の借財を減らすために全く手を拱いていたわけではない。一攫千金を夢見て材木を買い漁るという大博奕を打たれ、傷口を広げられた。このとき、甘い汁を吸った宍戸派の連中が未だ国表にも江戸藩邸にもおる。そこで殿は近年にないほどの厳しい暮らしを、自らにも藩士たちにも課せられた。殿は普段の膳には一汁一菜を命じられ、家臣たちにも同様の節約を願われた」

中居はごわごわした木綿の羽織の袖口を手で掴んで引っ張ってみせた。

「それがしも、ご先祖が着ておったものを引っ張りだして着ることにした。殿が一汁一菜にされたところで、六万両になんなんとする大金減らしには効果はなかろう。だが、のうのうとしている家臣どもに驚きを与えることは可能だ」

「殿はそこまでお考えにございますか」

磐音は嘆息した。

「なりふりはかまっておられぬ。そなたにも、ひと汗もふた汗も掻いて貰わねばならぬ。それが本日の用向きじゃ」

「ともあれ、父上の手紙を読んだ上でご返事申し上げます」

肩の荷を下ろした顔で中居半蔵が新しい酒と料理を頼んだ。

「坂崎、京で東様に出会うたとき、奈緒どのの行方っを追って旅をしていたそうだな」

奈緒が自ら苦界に身を沈める決心で関前城下橦木町の妓楼さのやに身売りをし、そこから肥前長崎、豊前小倉、長門赤間関、京の島原へ、遊郭から遊郭へと転売されたことを、そして、磐音が奈緒の後を追って、北国の加賀金沢まで旅をしてきたことを物語った。

「……この七日には、賑々しく吉原に乗り込む道中が催されるそうにございます」

「奈緒どのがさような目に……」

中居はしばし瞑目した。そして、両眼を閉ざしたまま、

「奈緒どのの不幸も、詰まるところ宍戸はの専横が生んだものだ。本来ならば、藩の金蔵を空にしてお助けださねばならぬ話だ。だが、情けないことにぶんご関前藩には、その身請けの金もない」

中居が目を開けて、磐音を見た。

「どうする気だ」

「中居様、世の中にはできることとできぬことがございます。貧したりとはいえ、六万石の関前藩が救えものを、それがし一人の力でどうなるものでもありません。今のそれがしには、遠くからなおどのの部位jを祈ることしかできませぬ」

「宍戸文六の老害が、あたら有為な人材、河出慎之輔、小林琴平ら数多の藩士たちの命を奪い、女達を不幸にしおった」

かみさんが割けと鰤の塩焼きと大根の炊き合わせを運んできた。

「どうにもならぬか」

中居が新しい徳利を差し出しながら、磐音に言う。

「なんともなりませぬ」

「われら豊後関前藩男どもは奈緒どのの不幸を肝に銘じて生きていかねばならぬ。他家に使いに出るのに絹物でのうては恥ずかしいなどという家臣どもに、奈緒どのの覚悟のほどをおわがこととしてほしいものじゃが……」

中居半蔵は自らに言い聞かせるように呟いた。

深川六間堀の長屋に戻った磐音は、行灯に火を入れて、灯芯を掻き立てた。中居半蔵が後刻読むようにと渡してくれた父正睦の手紙の封を切った。

＜坂崎磐音殿、江戸よりの帰路にある京にて東源之丞と、偶然にも会いしとか。仔細は聞き及び候。そなたにも奈緒どのにも不運をもたらした藩政を省みて、慙愧に堪えず、言葉もなく候。奈緒どのを苦境より救命できるかどうか偏にそなたの才覚と決断に関わりしが、父として一助すら叶わぬ身を嘆かわしく思い候。

磐音、父を許せ。豊後関前の窮乏を許せ。かような財政を生み出した不毛おの藩政を許せ。だが、決して藩主実高様をお恨みしてはならぬ。われら家臣一同の勤勉努力が足りなかったがゆえに実高様をも肩身の狭い身に追い込みし段、正睦、嘆いても嘆いても悔いが残り候。

さて、そなたが東に申した一件、藩の外にて藩の御用を勤めたしとの決心、父も賛成に御座候。そこでそなたにお願いの儀あり。かつてわれらが創案致せし、領内の物産を藩の管理下におき、借上げ弁才船にて上方、江戸に運び、一気に販売する策を再考致す所存にて候。この実行に向け江戸藩邸にても少数の藩士を人選し、

一　運営資金の調達

一　直営販路の開拓

一　雇船の借入先

等を検討する寄合を主催致す考えにて、そなたも藩外相談役にて加入されんことを願い候。

さて、今ひとつ、緊急内密にそなたに相談したき一件が御座候。

三月先に迫りし参勤下番の入費二千五百両の工面、国許はなんともつかず、昨年の五穀の取り入れも芳しからぬ折り、百姓どもへこれ以上の年貢申し付けは、一揆か逃散を誘発するは目に見えており候。そこで江戸にてそなたが世話になりおると申す両替商に刈り入れを相談してみてはくれぬか。また二千五百両の担保の件、しかとそなたにお頼み申し候。この一件の連絡方、御直目付の中居半蔵に命じ候。なお、最後にそなたに知らせ奥一条あり。殿とご相談の上、江戸家老が内定致し候。分家福坂家の嫡男、小太郎様改利高さまが近々えどに着任なさる手筈に御座候。機会をみて早急に今津屋との面会の仲介を願い上げ候。正睦＞

磐音は父の苦衷を思いつつも、今津屋への新たな借財の一件、重荷を背負ったなと、正直憂鬱になった。

（どうしたものか）

老分の由蔵にありのまま相談するしかあるまい。

今ひとつ、新しく江戸家老に就く分家の嫡男について、磐音にはあまり鮮明な記憶がなかった。

（どのような人物であったか）

関前藩は藩を二分した内紛の後だ。

本家と分家の力を結集して、藩全体の引き締めを図ろうという正睦の意図は察することができた。だが、人物が思い浮かばなかった。

磐音は床に就いた後もあれこれと考えてなかなか寝付けなかった。

翌日、宮戸川の鰻割きの間も、父の頼みが気になっていた。

六間湯に立ち寄り、長屋に戻り、正睦宛ての手紙を認めるかどうか考えていると戸が叩かれた。

早や中居半蔵の呼び出しが来たかと、

「戸を開けてくだされ」

と声をかけた。

すると吉原会所の長半纏を来た手代の竹造が顔を覗かせ、

びょこん

と頭を下げた。

「おおっ、竹造どのか」

「おおっ、竹造どのか」

「お頭が、もしお暇なれば吉原までご足労願えないかと申しております」

吉原になにか異変が起こったか。

磐音は黙って頷くと立ち上がっていた。

昼の刻限ながら二日から商いを始めている松の内の吉原、どことなく華やいでいた。

吉原の真ん中を貫く仲の町には、大黒舞いの三味線の調べが鳴っていた。

大門を潜った磐音は、竹造に案内されて四郎兵衛会所の奥座敷に通った。

「よう見えましたな」

「新年明けましておめでとうございます。本年もよしなにお付き合いください」

頷いた四郎兵衛が、

「ちと気にかかることがございましてお呼び立ていたしました」

と手にしていた煙管で煙草盆を引き寄せた。

「奈緒様のことにございますよ」

「奈緒どのは、明七日、丁子屋の御寮から吉原へ乗り込み、売り出すのではありませぬか」

「そこです。京島原の妓楼の朝霧楼は、京から江戸へ連れてくる道中、尾張に立ち寄っておるのですが、尾張の連中がこの江戸に奈緒様を取り戻しに来ているのですよ」

「はて、どういうことにございますか」

「朝霧楼の番頭は、主の九兵衛に、奈緒様を身売りする先を尾張と江戸の二つ天秤にかけるよう命じられていたのです。江戸に入る前に尾張宮宿の遊里に奈緒様を見せておるのです」

「なんと」

「昔から名古屋城下には遊里はございません。そこで熱田神宮の門前町に遊里が栄ました。この遊里に楊貴楼という遊女屋がございますが、朝霧楼の番頭は、この見世の主のに奈緒様を見せているのです。尾張の連中が江戸に押しかけてきたということは、番頭め、内金くらいは懐にいれたのかもしれませぬ」

磐音は何度か会った朝霧楼の主、九兵衛の狡猾そうな顔を思い浮かべていた。

「そこで楊貴楼では、京のババが虚仮にしくさったと江戸まで出てきて、丁子屋に奈緒様の身柄を渡せと掛け合ったのですよ。むろん丁子屋では、しっかりした証文があって、奈緒様を買い受けたのです。宮宿の楊貴楼に引き渡すいわれはないと、即座に突っぱねたそうです。だが、尾張の連中は、松の内七日の乗り込みは意地でも邪魔をする、血の雨を降らせても止めてみせる、と啖呵を切ったそうです」

「本気でしょうか。丁子屋の旦那が相談に見えたので、会所でも黙ってはおられませぬ。脅しだけか、それとも本気か。手代たちを江戸のあちこちに放って探索しています。今のところはなんとも申せません」

「尾張からは何人掛け合いに来ているのですか」

「十数人の大勢で乗り込んできていることはわかっています。となると最初から奈緒様の乗り込み道中に悪さをしでかす覚悟かもしれませぬ。そこで坂崎様を及びしたのでございますよ」

「四郎兵衛どの、ご配慮痛み入ります」

「むろん、吉原、尾張の連中に好き放題はさせませぬ。会所の総力を挙げても吉原の体面は守ります」

と四郎兵衛が言い切り、

「われらも尾張と吉原がぶつかり合って血の雨を降らせるのは本意ではない。第一、そうなれば、花魁の奈緒様に傷がつきます。吉原での暮らしに不運を呼びましょう。ともあれ丁子屋には乗り込みを一日二日待ってもらうように願ってございますが、そうそう長くは待てぬと申しております」

磐音は頷いた。

「坂崎様、お気持ちはお察ししますが、奈緒様の道中、われらと一緒に守ってはいただけませぬか」

とこの日の頼みを告げた。

磐音は静かに頭を下げて、承知した。

「坂崎様のことです。快く承知してくださると思っておりましたよ」

四郎兵衛が小さく首肯した。